

広報ながぬま「タンチョウ博士のお話」掲載

今年度も引き続き、広報ながぬま(毎月1日発行、長沼町内の全世帯へ配布)に「タンチョウ博士のお話」を年3回掲載しました。掲載月は6月、10月、2月。執筆は専修大学北海道短期大学名誉教授 正富宏之先生に依頼しました。

丹頂 (タンチョウ)



○タンチョウはワングル部員ですか？

長沼町にも、高校や大学のワングル部で活躍した方がおられるでしょう。ワングルの正式名はヴァンダーフォーゲル部で、もともとはドイツ語ですが、「V」がなじみがない発音なので、日本人は「W」と書っています。ワグナーは楽をする、放浪するなどの意で、フォーゲルは鳥のことですから、ヴァンダーフォーゲルは旅する鳥、つまりドイツ語で渡り鳥のことです。

さて、渡り鳥とは、季節により、異なる地域へ長い距離を移動する鳥のこと、と樹の本にありませう。では、質問です。タンチョウは渡り鳥ですか？

正解は、「はい、いいえ」の両方です。

同種のアメリカ川 (黄麻汁) を採み、ロシアと半端でもタンチョウは繁殖し、風の傳にくい冬は、西緯で1,000km (雁内一東京圏) から2,000km離れた中国南東部海岸や、韓国と全羅道の境の赤良長峙帯で暮らします。

では、繁殖地水地のタンチョウはどうでしょう。春一食は長沼町で繁殖し、冬は、川で餌のとれる日高へ行って暮らします。つまり、1年の暮らしかは同じなのに、大抵のは渡り鳥で、長沼のは「繁殖」と呼びます。その区別は、地域が異なるのと、長い距離の移動がなかったら、行けど、地域をどのように分けるか、長いとはどれほどの長さか、明確な決まりはありません。なので、白鳥群 (北海道) - 繁殖群 (青森県) 間約20kmを移動して渡り鳥、神内から新野間約100kmを移動しても留鳥ということになりかねません。



しかし、ワングルを「放浪する鳥」と呼べば、自立繁殖期間、タンチョウの習性はまさにあちこち放浪します。しかし、成鳥になると一定の繁殖地と越冬地を持ち、以後その間を往復するようになります。


越冬地水地で育ったタンチョウの子も、自立後、1月半ばに石狩の白鳥町や月形町で仲間と一緒にいて (図1)、5月に繁殖地水地へ戻ると顔を見せ、すぐどこかへ去りました。石鳥は今後も放浪を続けるでしょうが、実はこれが「繁殖」の一部でもあるのです。

こうして毎年循環で、様々な経験を通して繁殖は成長します。私たち人間と同じで、コトコトでワングルの概念が狭められ、広い世界に散れなくなった若者たちの成長が、気がかりです。(文：正富宏之)

■講演のお知らせ：第1回長沼タンチョウ・ガイド養成講座■
「タンチョウ博士のお話」執筆の正富宏之先生 (専修大学北海道短期大学名誉教授) をはじめとした専門家による講演会を、留鳥の観察予定で予約の申し込みを歓迎いたします。詳しくは、広報ながぬま7月号に掲載します。
【日 時】7月31日(土) 13時～17時 (会 場) ながぬまホワイティ・ベース 【問い合わせ】役所企画政策課 ☎76-8015

2021 - 夏 - 広報ながぬま 26

丹頂 (タンチョウ)



○今年「も」タンチョウは子育て中！

今年「も」タンチョウが繁殖地水地で子育て中です。でも、「も」のところは気がなりません？なぜ「も」のところだけ始まるのでしょうか？

タンチョウは、生まれてから3年経つ「幼鳥」となり、つまずき成長になり、子育てができるようになります。しかし、成鳥になってすぐに繁殖し、子育てを始めるのは限りません。いくつで結核し、いくつでも子育てを始めるかは個体によりさまざまです。この点はヒトと同じです。

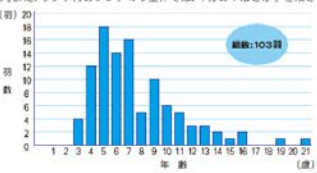
ヒトでは、初産年齢の平均は男性30歳、女性29歳というのが最近の傾向です。ところが、同じことをタンチョウで調べようとすると、区分の問題が出てきます。

ヒトの場合、そのヒトがいつ、どこで生まれたかは戸籍簿にしっかり記録されます。ですから、今これを踏んでいるあなたが、どこ生まれの何歳か、あなた自身はもちろん、身近なヒトたちも知っています。

しかし、いま北海道にいるタンチョウで、生まれた年と場所がだいたい分かるのは1割ほどで、残りの9割は年齢不詳、出身地不明の鳥たちです。それでも、1割ほどわかるのは、まだ飛べないうちに、生まれた場所や名札 (番号入りの足環) をつけたからです。これはまさしく、タンチョウのマイナンバーカード (札ではないのでマイナンバーカード) です。

そこで、ワングルのついでにタンチョウの繁殖地水地を、半数近くが3歳で、全体の3分の1ほどが4歳で結核して、性別による違いはありませんでした。また、中には、6歳になってやっと結核できた「オナナイ」(?) オナもいました。

それでは、初めての子は生まれるのでしょうか。マイナンバー持たしたタンチョウ103羽を調べた結果が下の図です。生まれた年の最初の冬まで子でも育てたタンチョウは、3歳ではわずか4羽でした。最も多いのが、5歳の18羽で、あとはだんだん少なくなり、21歳の初産 (7) になってやっと子も生まれたオスもいます。また、リング付のタンチョウ全体では、4分の1ほどが子を産むまでに死んでしまっています。



タンチョウは子育てを毎年行いますが、どれほど続けられるのでしょうか。100歳のタンチョウのうちの約7割は、今年子どもを育てたら、来年は育児に成功しません。2年続けて、いわゆる「年子」を育てるのは約20羽ほどです。そのほか、3年から6年の間、毎年子育てするの約5羽います。

しかし、なんといっても「10年連続子育て成功」という、ギネスブックに載せても恥ずかしくない偉業の記録は、当分残れそうにありません。

ところで、繁殖、表題の「も」は何だったのかという点、繁殖地水地のタンチョウは、ヒトが渡った里地での繁殖という「留鳥」に加え、昨年3歳になってすぐ子育てに成功し、しかも、続けて今年「も」です。いわば、上に述べた数々の除き門をくぐり抜けたことになり、私は、表題の「も」の中に、心からの拍手を送りたいところです。ご質問いただけましたでしょうか？ (文：正富宏之)

【問い合わせ】役所企画政策課 ☎76-8015

2021 - 秋 - 広報ながぬま 22

丹頂 (タンチョウ)



○ふたたび、君の名は？

本紙で「タンチョウ博士のお話」の連載が始まって2回目(2017年4月号)に、「君の名は？」という題で一文を書きました。その際の書き出し「タンチョウ」でした。

今回もまた同じ構えですが、答えは同じではありません。今回の答えは、タンチョウという生物の「種」を視する者前でした。しかし、1個体しかない絶滅寸前の動物は別にして、「種」は複数の個体からなるのが普通です。

たとえばヒトという「種」は、80億近い個体からなります。日本という地域に限っても約1億2000万という数があります。そして、その一人一人に特有の記号、つまり名前がついています。

この個体記号があるからこそ、個体は個体でも、名前をもとにそのヒトの記録や記憶が残ります。歴史書の多くはいわば名前があって成り立ち、しかも個体の特性を明らかにすることで、個体と個体との関係、つまりヒトの社会の仕組みも見えてきます。

では、ヒト以外の動物はどうでしょう。名前がなくてもさかたがが少しづつ覚え、これを手掛かりに、個体を特定できます。しかし、タンチョウではどうですか。確かに真の白鳥模様などいくつか手掛かりはありますが、決め手はごく限られます。ですから、群れているツルを1羽1羽見分けると、専門家でも、とてもできない知識です。

繁殖地水地を繁殖しているタンチョウのオスとメスは、いくつも見分ける手掛かりがあり、区別はつきます。ただ、微妙な違いなので、判別は容易ではありません。でも、もしどちらかが死んで、別の個体が後量 (再婚) に入ったら、見分けがつかず。

しかし、餌と水の争い、新しい相手が見つかるも同じツルにしか見えません。そこで、タンチョウは生涯同じ夫婦で暮らすという神話が生まれ、結婚式の巻物や引き揚げ物などに「モテる」のです。



今、繁殖地水地の家族は越冬地へ行って不在です。しかし、どこかで見つけたのが越冬地の家族か否か、確かめるのはとても難しいです。それを簡単にする手掛かりの一つは、タンチョウ1羽ごとに名札を付けることです。標識付けが、一般に見慣れていることからバンディング (バンド付け) などと呼ばれます。

ただそれに、相手を手に入れる必要がある、繁殖方法も季節的・くくり際・無気味な点もいろいろあります。これまで主に半羽で800羽以上のタンチョウに標識を付けていますが、作業中の事故でごく少ないものの、残念ながらゼロではありません。解凍で標識付けなどせず、遠くから高遠送のような方法で個体識別ができるシステムはできないかと思っています。

ともあれ、上にあげた再婚なども、標識付けで初めて明らかになったことです。越冬地で越冬の家族を守ることに、繁殖地水地でツルを守ることもへんがっていますから、鳥獣保護科を付いたバンディングは、細心の注意を払って行うべきでしょう。(文：廣瀬 正富宏之)

【問い合わせ】役所企画政策課 ☎76-8015

2022 - 冬 - 広報ながぬま 26

第26回
「タンチョウはワングル部員ですか？」
広報ながぬま2021年6月号に掲載

第27回
「今年「も」タンチョウは子育て中！」
広報ながぬま2021年10月号に掲載

第28回
「ふたたび、君の名は？」
広報ながぬま2022年2月号に掲載